

IT パスポート試験受験に向けた取り組み

北海道札幌国際情報高等学校教諭 小林 勝巳

1. はじめに

(1)本校の概要

本校は平成7年、国際化・情報化・技術革新及びサービス経済化などの社会・経済・科学技術の進展に対応するとともに、個性と創造性をのばし、国際社会の発展に積極的に貢献する心豊かで心身ともにたくましい人材を育成するため、複合的な教育を目指す新しいタイプの高等学校として札幌市北区に創立された、普通科6、国際文化科（英語）6、情報技術科（工業）3、情報システム科（商業）3、流通サービス科（商業）6の24学級（学年8学級）5学科集合型の高校である。

(2)情報システム科の概要

生徒の約90%が進学（資料1）を希望するため、「進学型専門学科」の目標を掲げ、高度な資格取得と国公立大学への進学を目指している。

進路 決定先	大学		短大	専門学校	就職	その他
	国公立	私立				
24年度	9	16	0	7	4	3
23年度	9	14	3	5	5	4
22年度	9	9	4	8	5	5

（資料1 学年1学級 実人数 単位：人）

従前の推薦・AO入試のみならず、一般入試でも合格できるよう、1年時から進学講習や大学受験を意識した進路指導を実践し、難関の北海道大学を始め小樽商科大学や北海道教育大学、道外では弘前大学、筑波大学、東京農工大学、横浜国立大学等へも合格者を輩出している。

2. 教育課程

特徴として、学習指導要領第3款各教科・科目の履修等 2専門学科における各教科・科目の履修(1)に記されている「外国語に属する科目の単位を5単位まで含めることができる」ことから、商業に関す

る科目は20単位で構成している。ややもすれば「商業科目軽視」と捉えられることもあるが、教科・科目の目標は十分達成しているものと自負している（次ページの情報システム科教育課程表を参照）。

3. ITパスポートの現状

周知の通り、平成23年11月よりCBT方式へ移行した。基本情報技術者や初級システムアドミニストレータ（以下初級シスアド）が、情報の専門的な知識を求める試験であったのに対して、ITパスポートでは「職業人が共通に備えておきたいITに関する基礎知識を測る」試験と明言されている。これはITのすそ野を広げたいという国の指針にもあるとおり、初級シスアドより難易度を下げ、さらに受験しやすいCBT方式にすることで、ITパスポートの受験者増加を狙っている。しかし、それにより高校生の受験者及び合格者・率はどのように変化したのであろうか。IPAの統計資料（資料2）からITパスポート試験の受験者・合格者の推移を鑑みると、基本的に試験会場・試験の時期や時間を受験者が選択することができることから、移行前より受験者が増加すべきところ、いずれも減少傾向である。

	筆記	CBT
	平成23年度	平成24年度
受験者	14,568	11,827
合格者	3,601	2,041
合格率	24.7%	17.3%

（資料2 単位：人 高校合計）

特に合格率の低下は、CBT方式による教師の指導対応の困惑と生徒の学習方法の問題が感じられる。

4. 本校におけるITパスポートの取り組み

本校情報システム科では、Basic資格—全商情報処理検定（ビジネス情報1級、プログラミング1級）、

〈情報システム科〉 (1年次33単位 2年次33単位 3年次31単位 合計97単位)

														7			
1年	国語総合	世界史A	数学I	数学A	生物基礎	体育	保健	音楽I 美術I 書道I	コミュニケーション英語I	英語表現I	ビジネス基礎	IT基礎	情報処理	LHR	総合的な学習の時間		
選択21								1	9								
2年	現代文B	古典読解	政治・経済	発展数学 (前期) (後期)数学II プログラミング研究	地学基礎	体育	保健	コミュニケーション英語II	英語表現I	家庭基礎	簿記	プログラミング	LHR	総合的な学習の時間			
選択31							4	4	選択32	選択33							
3年	現代文B	倫理	日本史B 地理B	化学基礎	体育	コミュニケーション英語III	課題研究	電子商取引 財務会計I 秘書実務	古典講読 総合実践 経済活動と法	選択A	選択B	選択C	LHR	総合的な学習の時間			
										数学II	数学B	理科基礎研究					
										数学研究I	ビジネス経済	ライティング					
										コンピュータグラフィック	ビジネス情報	原価計算					
										ビジネス情報管理	日本文化	広告と販売促進					
										基礎フランス語	生活科学	国際ボランティア基礎					
										基礎ロシア語		音楽II					
										基礎中国語		美術II					
										基礎ハンガール							
										音楽II							
										美術II							

注意事項
 ②選択Aの数学IIは、選択21で履修したときのみ履修できる。また、選択Aの数学IIと選択Bの数学Bは連動している。
 ③選択Aの音楽II・美術IIはそれぞれ、音楽I・美術Iを履修したときのみ履修できる。さらに、選択Cの音楽II・美術IIは選択Aの音楽II・美術IIを履修したときのみ履修できる。

情報システム科教育課程表

Standard 資格—IT パスポート, Advance 資格—基本情報技術者以上と位置づけ、2年時4月、40名全員にIT パスポートを受験させている。受験料は年度初めに2回分を徴収し、不合格者は年度末に2度目の受験をさせている。その間、個人で受験する者もある。教科・科目による指導はIT 基礎(学校設定科目3単位)と情報処理(2単位)を充てている。当然、授業だけでは範囲を消化できないので、講習等も積極的に実施するとともに、専門学校等の無料講習にも積極的に参加を促している。次に具体的な内容について述べる(教育課程表を参照)。

(1)科目「IT 基礎(1年時3単位)」

科目「情報処理(2単位)」とともに、教諭1名、実習助手1名の2名体制で担当している。授業はテクノロジ系を中心に指導するが、学校設定科目のため、教科書不要であり副教材として専門学校発刊のテキストや市販のテキスト等を用いている。また、eラーニング教材も活用しCBT 対策も行っている。授業時数が100時間前後しかないため、テキストと問題集を併用し、初学者に対し効率よくかつスムーズな学習を心がけている。

(2)科目「情報処理(1年時2単位)」

9月までは全商情報処理検定ビジネス情報2級の取得に向け、実技を中心に指導している。検定後は、1月の同検定プログラミング2級の取得に向け、VBAをツールにアルゴリズムを学習する。その後は20時間程度マネジメント系を中心に指導する。

両科目とも教科担当が同じなため、進度を考慮し時間配分など適宜融通しているのが現状である。

(3)講習の実施(1年時3月—2年時4月)

さて、高校生が比較的苦手とするストラテジ系の学習については、主に放課後・週休日等の講習に委ねるのが現状である。約1ヵ月間、30時間程度の講習を実施している。この時期の年度末休業および年度初休業の14日間を利用し最終まとめを行う。模擬試験を実施し分野別の弱点克服に向け、生徒各々が学習に積極的に取り組むよう指導することが肝要である。

(4)基本情報技術者試験に向けて

2年時より科目「プログラミング(6単位)」において9月に全商情報処理検定プログラミング1級、翌1月にビジネス情報1級を受験させ、その間、

ITパスポート取得者には10月の基本情報技術者を受験させている。今回は紙面の都合上、具体的な取り組みについては記さないが、学年別資格取得状況(資料3)を参照していただきたい。

(5)センター試験「情報関係基礎」に向けて

前述した科目「プログラミング(6単位)」では、まとめとして大学入試センター試験「情報関係基礎」に取り組ませている。進学希望者が90%以上のため、2年時修了までに全員で取り組んでいる。3年時における実受験者の平均は得点率80～85%で推移している。進学指導については機会があれば別に述べることにする。

	平成25年度 (現2年生)	平成24年度 (現3年生)	平成23年度	平成22年度
IP	13	31	31	27
FE	10月受験	5	9	5

(資料3 学年別資格取得状況 単位:人/40人)

5. ITパスポート試験における指導上の留意点

周知の通り、試験時間は165分であり、単純計算で1問あたり約100秒での解答が求められる。出題範囲の3分野(ストラテジ系・マネジメント系・テクノロジー系)の点数がそれぞれの基準点(30%以上)をクリアし、全体として60%の正答率があることが合格の条件となるため、苦手範囲を作らないように満遍なく学習させなければならない。

実際に出題された問題を分析してみると、初級シスアドでは過去問題を流用した出題が多かったが、ストラテジ系を中心に新出題が多くなっている。これは、これまで有効とされていた過去問題に重点を置いた学習方法から、幅広い知識や応用力をつけさせる学習方法が求められる。その方法として

(1)用語から解説へ

初級シスアドでは、説明文から適切な用語を四者択一する問題が多くみられたが、ITパスポートでは、用語から適切な説明文を選択する問題が増加した。そのため、うる覚えの知識では正解を択一できない

ため、時間はかかるが他の説明文に相当する用語も関連付けて解説する必要がある。

(2)不正解が次の正解に

前述した内容と同義になるが、CBT方式の問題作成のメリットとして、1問が4問になることである。つまり、本問の不正解が次問の正解となりうるため、正答の解説だけでなく、本問では誤答であるものも正確に解説することが大切である。そのためには、指導する側の知識の深さや専門性も求められるため、日々の研修を欠くことができない。

(3)IRT(項目応答理論)による評価

正解した問題数が同じでも、どの問題に正解したかで総合評価が異なる。これはCBT方式の多くの試験で採用されているが、筆記でITパスポートを指導する場合と評価が異なる。高校教育の場で指導する我々には難解な理論であるため、素点評価や専門学校等の配点を目安にすることで対応せざるを得ない。

6. おわりに

「先生！Iパスに受かりましたよ！ありがとうございますでした」生徒からの一言が私たちの活力になっている。特に3月・4月は定期考査、卒業式、高校入試等々、教師として多忙を極める中、土日祝休日を返上しての講習は、教材研究の時間も含め重労働である。また、資格取得は終わりではなく始まりである。コンピュータは世界共通のビジネスの言語であり、その基礎基本を学ぶことは、グローバルな変化に柔軟に対応できる能力を身につける上で欠かすことができないものである。全国の指導に当たられる諸先生も思いは同じであろう。

本校の取り組みがベストでは決してない。学校環境が異なる中、日々指導されている諸先生に敬意を払うとともに、忌憚のないご意見・ご助言をいただくと幸いである。今後ともあの生徒の一言を聞くことができるよう研鑽していかなければならないと思う。